

大垣さんの死に思う

阿部直哉

大垣さんの死を知らせるメール、それは、まったく予期しない、突然のメールだった。

私は、今から 8 年前の 2004 年に大学を辞めると同時に、生物の研究もすべて捨て、新しい世界に飛び込んだ。大学院時代の 1 年先輩の吉村さんと共に IT 関連の会社を立ち上げ、私たちが創り出した新しいコンピュータ言語を使ったシステムを世に出そうとしている。少しずつ前に進んでいるが、まだ、世の中に認知されたとは言いがたい。そんな私にとって、死ほど怖いものはない。今はまだ、やり残したことが多く残っているからだ。

大垣さんは、どうだったのだろうか。彼は悔いのない人生を送れたのだろうか。彼の死を知って、そんなことをとっさに思った。ふいに、涙が湧き出してきた。

私が大学を辞め、東京に来てからも、たまに大垣さんから電話があった。それは、たとえば「阿部さんたちが、以前、瀬戸の海岸に南の方から持ってきた黒い岩を貼り付けたことがあったけれど、その顛末を詳しく知りたい」といったものだった。4、5 年前だっただろうか、大垣さんから誘いがあり、武蔵小金井駅前で飲んだこともある。彼の実家が小金井市の近く（確か、府中か、調布）にあり、そのときは、実家に帰っているからということだった。しかし、そう言えばこの 1 年は、連絡がなかった。

今日、久しぶりにアルゴノータのサイトを開いた。

アルゴノータのサイトは、私にとっては、馴染み深く、懐かしいサイトである。元々は、私が作成したものだからだ。しかし、実際に私が関わったのは、アルゴノータの表面的なほんの一部であった。アルゴノータを立ち上げ、続けてきたのは、すべて大垣さんの努力による。大学や博物館などに職を求めず、あえて、市井の研究者として生きた彼にとって、アルゴノータは議論の場であり、発表の場であった。おそらく彼は、アルゴノータに、研究活動の場として、大きな意義付けをしていたのだろう。彼は、一度、意味を見出したことに対しては、決して妥協しないで黙々とやり続ける人であった。

久しぶりに開いたアルゴノータのサイトで、大垣さんが、昨年、そのライフワークであ

った生物相の長期変動を「浅海生物相の長期変動 - 紀州田辺湾の自然史」という本にまとめたこと、また、瀬戸の Special Publication として、白浜番所崎貝類相のデータ集を出版していたことを知った。なんだか、少しほっとした。さすがに大垣さんである。それらが、彼の力強い足跡として、今後、長く残っていくことを願う。

大垣さんのご冥福をお祈ります。

(あべ なおや・株式会社カテナス)